

現在のホト神さま・・・花園稲荷神社

中沢新一が「アースダイバー」（2005年5月、講談社）で第9回桑原武夫学芸賞を受賞した。2006年7月に京都で授賞式があったので、私も出席した。彼は言う。『アメリカ先住民の「アースダイバー」神話が語るように、頭の中にあったプログラムを実行して世界を創造するのではなく、水中深くダイビングをしてつかんできたちっぽけな泥を材料にして、からだをつかって世界は創造されなければならない。』・・・と。

「アースダイバー」神話が語っているような作業について、中沢新一は『気ままな仕事に見えるかも知れない。でも、僕の抱える中心的な問題は全部含まれる。地底から縄文の思考を手づかみすることは、歴史の連続性を再発見すること』・・・であると言っている。

そうなんだ。私たちは、その地域の「歴史と伝統・文化」の奥深くダイビングをして泥臭い何かをつかんできて、それを材料に身体をつかって新しい世界を創造していかなければならないのである。そのために、今、私は、「ジオパーク」と取り組んでいる。

中沢新一の「アースダイバー」に上野は花園稲荷神社の「お穴様」がでてくるので、私は早速上野公園に行ってみた。



「お穴様」には、上野公園の東京文化会館の南側の道を通って、西方向に歩いていく。広い道に出るともうそこが[花園稲荷神社の入り口](#)である。

[中に入っていく。](#) [階段の向こうに花園稲荷の本殿が見える。](#) [はや、本殿についた。](#)



これが「お穴様」！

これは、狐の棲んでいた洞窟だという説明が一般的だが、違う。これは「お穴様」である。何の穴かって??そりゃ決まっているでしょう。観音様ですよ！ 穴観音！

[立派な祠もある。](#)



お多福人形
(講談社の「アースダイバー」より)

さて、お稲荷さんとお狐さんとの関係について少々説明しておきたい。
伏見人形の中には狐が多く見られるが、ここでお稲荷さんと狐の関りについて簡単に紹介しておく。小林すみ江著の『人形歳時記』（一九九六年一月、オクターブ）に簡潔に説明してあるので引用する。

この神様（宇賀之御魂命）はまた大御膳神（オオミケツノカミ）とも呼ばれるが、この「みけつ」に誤って「三狐神」の文字をあてたこと、また稲荷の本地とされるインドの荼枳尼天（ダキニテン）が狐に乗っていたこと、さらにはわが国にも古来狐に対する根強い民間信仰があったことなど、多くの要素が重なり合って、あのお狐さんが稲荷の神のお使わしめということになったらしい。

この他にも、狐の尻尾が稲穂に似ているから、稲荷山に狐が多く棲んでいたから、など諸説がある。

さて、このお狐さんだが、お稲荷さんのお使いだから伏見人形に多く作られるのは当然の事なのだが、その伏見人形の狐には面白い特徴を持ったものが作られていた。次に紹介するのは、『高倉宮・曇華院跡第四次調査 平安跡研究調査報告 第十八輯』の第五節「江戸時代」の五、「土人形」の内容である（『稲荷信仰と宗教民俗』大森恵子著）。

信仰に関するものでは、「狐」と「土鈴」が量的に多く、また多様な形を表している。「狐」は座位で頭を横に向け、一対になるものが一般的であるが、尾を男根型につくったものがある。なぜ狐の尾が男根になったのであろうか。

それは「稲には繁殖させる穀霊が宿っているという信仰から、稲荷神は子授け・夫婦和合の神としても信仰されるようになった」からだと思われる。「稲荷神は性神」でもあったのだ。そして、稲荷神の化身動物が狐なのだ。稲荷信仰とは別に古くから性器に対する信仰があったが、その対象である男根と狐の尾とが結びついたのだろう。稲荷信仰は五穀豊穡を願うもので、全てのものを増殖させようとする信仰こそが稲荷信仰の源であり、その性的な意味を具現化したのが狐の尾の男根なのである。

伏見においては、性を表現した土人形は狐ばかりではなかった。「わらい」と俗称された、性的な行為を表現した人形や男女の性器を型取った土細工が、明治初頭まで伏見稲荷の参道の土産物屋や人形屋で販売されていたのである。「松茸持ち立ちお多福」「松茸持ち居お福」「馬乗り」「子供乗りお福」「おまら大明神」など多数あったらしい。（出典：『江戸岡場所遊女百姿』花咲一男著）



お多福の底はみだりに見ないでね。
どうしても見たい時は右にお気持ちをどうぞ、と書いてある。
(お多福の底にはホト神様が鎮座します)



(このお多福の底にもホト神様が鎮座します)